

非認知能力について

保育園で育まれる「非認知能力」について、東京大学教授の遠藤利彦先生がミネルヴァ書房「発達」2022年170号の巻頭言に「非認知能力」について述べられています。6年くらい前だったと思いますが、非認知能力について私が初めて知った時に遠藤利彦先生の「アタッチメント」の論文を読ませていただき、大きな共感をもって保育について改めて大切な示唆を頂き、保育の働きのすばらしさを見直すことができたと思います。

研究現代社会の人間の生き方、特に子どもたちの教育に関して今までのような教育で良いのかどうか転換期にあるのではないだろうかと言われています。はじめに非認知能力について細かく解説されています。非認知能力を自己と社会性とに関わる心の性質として捉えた場合、自己に関わる心とは自尊心、自己肯定感、自己効力感、好奇心、意欲、内発的動機付け、自制心、我慢強くやり抜く力「グリット」、自己理解、自制心、自律性、自立心、等になります。社会性に関わる心とは他者の「心の理解能力」、コミュニケーションをとる力、共感性、思いやり、協調性、共同性、道徳性、規範意識、等です。そして両者とも感情のコントロール、感情を自己管理する能力も含まれるそうです。これまでの教育は社会的に価値があると位置づけられた情報や知識を蓄え、それを社会が求める方向にきっちりと活用する力を身につけさせることが重要視されてきました。それは主に個人の能力を高めるということでした。私は今までの教育は利己的な競争を煽り能力主義が横行する時代であったかもしれないと思いました。しかし、現在は、あらゆる知識は簡単に誰でも取り出せる社会になっています。有能な個人が知識を獲得し、それを個人の力で自分の為に社会に活用するという時代ではなくなっているのだと思います。蓄えられたあらゆる知識を自分たちの社会の為に何が必要なのかを多くの人と協力し話し合いそれを取り出し、活用できる人材をできるだけ多く育てることにシフトしなければならない時代になっているのではないかと語っています。お互いが連携を深め、力を合わせな

がら一体となって社会的に必要なことを行うことができる社会を構築する時代を目指すべきではないのかということです。その為に乳幼児期の非認知能力を高める保育及び教育がより重要性を増しているのだと語っています。一人の有能な天才をより多く育てるということではなく、できるだけ多く、お互いに協力し、力を合わせ、支え合うことができる人材の育成がこれからの社会には必要であり求められていると思うのです。コロナの感染は世界の多くの人たちが情報を共有し、様々な症状や症例を提供し、そしてその膨大な情報を共有しながら有効なワクチンを作っています。非認知能力の高い人たちが多くかかわっているのかもしれませんが。特許や企業としての秘密等を占有する社会から社会的な価値のある物を社会全体で共有し活用できるような社会にならないければ私たちの未来は非常に悲観的なものになると思われまます。環境破壊を食い止め、人口爆発に対応するためには国境をなくし、人種、民族、宗教、思想の違いを互いに認め、協力、連携しなければこれらの課題は対処できないのです。半面、ウクライナや中東等の戦争は主に特定の個人の利己的な思い、特定の宗教しか容認できないというようなことによって争いが行われているように見えます。その特定の思想や個人の思いによってその社会は多くの人々が希望する方向ではなく、まったく正反対の方向に突き進んでいるようです。個人の利己的な思いや利益を個人として占有したいという欲望が強まれば強まるほど世界中で起こっている戦争や争いは修正が出来なくなっています。正しい人間の生き方を見つけ出すことができない世界になっています。私たち人間がどのように生きれば人間として良い生き方ができるのかを、お互いがお互いの為に生きるという世界を造らなければならぬのです。そのために子どもたちをどのように保育し教育するのかを考え議論しなければならぬのです。そして改めて非認知能力を身につけることの大切さが見えてくると思います。非認知能力はただ一般的な知識として教えるのでは身につかないのです。机に向かって学習して身につける能力ではありません。たくさんの人たちとの自発的な遊びや多様な活動を展開するかなで徐々に子どもたちに培われてゆくのです。そして自己の心に関わる心は乳児期に個々の保育者との関わりによって育まれます。社会に関わる心は幼

い時に継続的に体験する生活によって、また乳児から幼児に成長し様々な集団活動によって育まれるのだと思います。様々な活動の中での他者とのふれあいや体験によって得られたうれしい、楽しい、誇らしいというプラスの感情や悲しい、恥ずかしい、悔しい等のマイナスの感情を経験し、それぞれの感情を大人(保育者)が共感し暖かく見守って受け止めることが大切なのです。感情が崩れている時に、大人が支え立て直し、安心感を与えてあげることが非常に重要なのだそうです。大人(保育者)は子どもの感情を通した学びの支え手として、子どもの気持ちに寄り添い、慰め、励まし、ともに喜び、同じ目線で一緒に考え、時には大人としての知恵をそっと示してあげる何気ない行為の積み重ねが子どもたちの「非認知能力」を立ち上げる大きな支えになるのだそうです。これはまさに私たちが理想とする保育の姿であることを保育に携わっている私たちは強く共感できると思います。

私たちは子どもたちの姿を報告するとき意外と多くの問題点を指摘しその対策を考えることがよくあると思います。ケース会議では子どもの問題点や発達の遅れについて報告することに大きな時間がかけられています。子どもの課題や問題点を共有することも大切だとは思いますが、子どもの良さや子ども自身が努力していること、優しさや頑張り、できること等、些細なことであってもそれを職員全員で共有することがとても大切なのではと思うのです。私たちは気付かない子どもの良さとか成長の姿を発見することに重点を置くべきです。また、何かいけないことをしたとき意外と私たちは多くの友達の前で「いけない。」とかダメ出しをすることが良くあります。ダメ出しだけではなく、その子が良くできたこと、頑張ったこと、優しい行動ができたこと、等、多くの子どもたちの前で先生が言ってあげること、その子は新たな励ましをもらい、喜びを感じることができるのだと思います。非認知能力を確認する対応としてそのようなことの積み重ねが重要なのだと思います。私たち自身が子どもをどのような視点で見なければいけないのか改めて優しい、あたたかな思いが、子どもたちの成長にとって大切であることに気付かされるのです。